

特集

第61回掃海殉職者追悼式等

掃海殉職者追悼式の経緯

太平洋戦争中、瀬戸内海及び日本近海には6万7千個に及ぶ各種機雷が敷設されましたが、戦後、掃海部隊はこれらの膨大な機雷の掃海に従事して、総面積5千平方キロ、180カ所にのぼる主要な航路、港湾泊地を啓開し、我が国、産業経済の復興に大きく貢献しました。この間、各掃海隊員は風浪と戦い、寒暑を克服して、危険な作業に挺身しましたが、不幸にも79名の方が職に殉ぜられました。これら、掃海殉職隊員の偉業を永久に称えるため、海にゆかりの金刀比羅宮境内の中に「掃海殉職者顕彰碑」が建立され、毎年、その碑の前で追悼式が実施されています。



「海防艦 大東」



「新井崎」

掃海殉職者顕彰碑

掃海殉職者顕彰の碑は、兵庫県知事(瀬戸内海国立公園観光事業促進協議会会長)、香川県知事をはじめ、海にゆかりのある1府10県にわたる32港湾都市の市長が発起人となって昭和27年6月に建立されたもので、碑文は、当時の首相、吉田茂氏が揮毫されたものです。

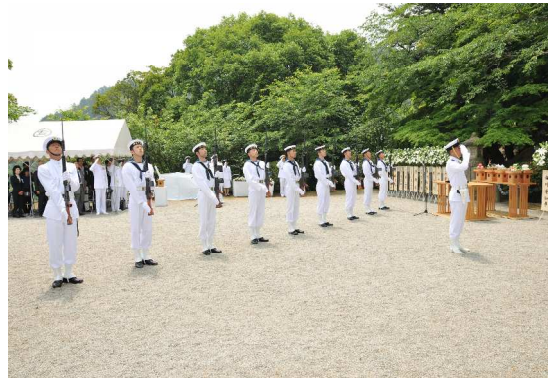
第1回追悼式は昭和27年6月23日、遺族50余名を含む関係者400名が参列し執行されました。以後、毎年、5月の最終土曜日に実施され今日に至っています。



平成24年度の追悼式の模様



慰霊碑を中央に参列者(左奥はご遺族)



国旗掲揚時に儀仗隊の「捧げ銃」

第61回掃海殉職者追悼式は5月26日(土)、香川県高松市琴平町の金刀比羅宮内の掃海殉職者慰霊碑前において、多くの参列者を得て、呉地方総監により執り行われました。海上幕僚監部からは、海上幕僚副長が参加されました。

追悼式は天候にも恵まれ、ご遺族(6家族、19名)のほか、地元国会議員、自治体の長、隊友会、防衛協会等のご来賓をはじめ、元呉地方総監、歴代掃海隊群司令等、さらには旧海軍、航路啓開隊、海自掃海部隊OB及び呉水交会の方々等がバスを借り上げ大挙して来られるなど、例年どおり多くの参列者が一同に介して厳粛に執り行われました。

式は、執行者 呉地方総監による殉職者霊名簿が奉安されたのち、黙とうを行い、大野元防衛庁長官、浜田香川県知事(代理)、小野琴平町長、勝山呉水交会会長及び掃海隊群司令による追悼の詞、儀仗隊による敬礼及び弔銃発射、献花、呉音楽隊による追悼演奏(「掃海隊員の歌」、「同期の桜」、「巡検ラッパ」、「海ゆかば」)、霊名簿の降納等の次第により行われました。

参列した掃海隊司令、ぶんど艦長、艦艇長をはじめ、掃海部隊幹部及び前任伍長、海曹士は、掃海殉職者おひとりおひとりを偲び追悼するとともに、先駆者の偉業を振り返り、身をもって示された遺訓を掃海部隊の伝統として継承していくとともに、本年も心を新たにしました。



徳丸掃海隊群司令による追悼の詞(次ページに全文掲載)

追悼の詞(全文)

本日ここに、新緑に陽光注ぐ金刀比羅宮の神苑において、第六十一回掃海殉職者追悼式が挙行されるに当たり、海上自衛隊掃海部隊を代表し、謹んで追悼の詞を申し上げます。

顧みますれば、大東亜戦争末期、我が国の主要港湾及び海域に日米両軍が敷設した機雷は、その数、六万七千の多きに上るものでありました。中でも、米国が対日飢餓作戦と称して関門海峡を始め、瀬戸内海、伊勢湾及び東京湾の各海域に敷設した感応機雷約一万個は、四面環海の我が国の命脈を繋ぐ海上交通を途絶に追い込んだのであります。そのため、終戦後はこれらの機雷を残らず排除し、海上交通の安全を確保することが国家再建上喫緊の課題でありました。敗戦の混乱と虚脱の最中において、当時の掃海従事者は、疲弊した国力を回復させるため、困難かつ危険に満ちた任務に敢然と立ち向かい、新生日本の航路を啓いて、今日の平和と繁栄の礎を築いたのであります。

さて、私事ではありますが、私の父も昭和二十年十二月から昭和二十七年五月の海上警備隊入隊までの間、佐世保掃海部、下関掃海部そして神戸海上保安部航路啓開部においてディーゼル員として勤務しておりました。その間、昭和二十五年十月の韓国元山沖の掃海業務にも従事しております。父は、幾度かこの金刀比羅宮には参拝いたしておりますが、横須賀在住ということもあり、この追悼式には参加したことはありませんでした。今回は是非参加したいという強い思いがありましたが、体調が優れず残念ながら参加することはできませんでした。同僚が志し半ばで職に殉じられた情景につきましては、私も幼い頃父から聞いておりました。その父も三度、危険と隣り合わせとなり、今考えても生き残れたのが幸運であったと申しております。一度目は玄界灘で掃海作業に従事している時でした。中学を中退し、16歳で予科練に入り2ヶ月で終戦を迎えた父は、幼い頃に病で父を亡くし母子家庭であったこともあり、針生にある第2復員省の地方局で職を探しておりました。その時、掃海艇乗組員の募集があったため、父は直ちにこれに応募しました。まだ、復員省も組織だった業務を実施するには至らなかったようで、志願者は2列に並ばされ、前列は駆潜特務艇248号に、後列は250号に乗り組むように指示されたそうです。一度前列に並んだ父は、友人の顔を後列に認めたため、そこに移動しました。その後、掃海作業中に、前列が乗船した248号が触雷し、沈むこととなりました。二度目は下関の満珠島付近での磁気掃海作業中の出来事です。父が乗り組んでいた駆潜特務艇は、当日は母船を支援する脇船として掃海作業に従事する予定でしたが、母船が出すべき電らんを作業員が誤って繰り出してしまいました。これを揚収するにはまた手間がかかるため、父の乗る艇は、そのまま母船として電らんを曳航することとなりました。母船になると発電機により電らんに電気を供給しなければならないため、ディーゼル員としての作業はきつくなります。父は、ついていないと思ったそうではありますが、共に作業をしている掃海艇3隻で回頭している最中に脇船が触雷し沈みました。三度目は韓国の元山においてであります。まず、掃海開始前に陸から射撃を受けたそうです。それに対し、米国は駆逐艦による艦砲射撃を行い、この攻撃を阻止しました。その後、4隻で掃海作業を開始しました。父の乗る掃海艇には機雷敷設に詳しい者がおりました。その者が、元山にある大きな木とそこから離れた岩を見て、これを結ぶラインは危険だから避けた方が良くと艇長にリコメンドし、そのとおりにしたそうです。

後続してくる掃海艇はそのラインの方向に向かい、その後、触雷しました。皆様ご存知のとおり、この時、作業のため艇内に入った1名の方が殉職いたしております。もし、父がこのいずれかの機会に殉職していたならば、私はここで追悼の言葉を述べることはできておりません。ここで眠られている79柱のご英霊も、本来であるならばご家族と、そして新しく引き継ぐ命と共に幸せな家庭を築けたところ、その職に殉ぜられましたことは、痛恨の極みでありましょう。輝かしい航路啓開の偉業と共に、途半ばにして壮烈な殉職を遂げられた皆様のあったことは、我々掃海部隊の末裔のみならず、すべての日本国民の心にとどめられ、その誇りは長く語り継がれることでありましょう。

翻って、現在の我が国を巡る国際環境は厳しく、国家指導者が交代し、国際社会からの度重なる中止要求にもかかわらず飛翔体を我が国南西諸島方向に向け発射する暴挙を平然と実施する国、また、海洋権益の確保に向けた活動を行い外洋への進出を活発化させている国等、情勢は緊迫はすれども緩まる気配はありません。そして、中東に目を転ずれば、核開発を巡る力の駆け引きが行われており、その結果としてホルムズ海峡の安定に懸念が持たれ、掃海部隊にとっては対応が求められる可能性も否定できないという厳しい現実もあります。そのような中思い起こせば、今から二十余年余り前、掃海部隊がペルシャ湾に派遣され、困難な業務を安全かつ適切に遂行し、先輩から受け継いだその実力が世界から認められることとなりました。また、昨年、東日本大震災においては、掃海部隊の艦艇及び水中処分員が直ちに出勤し、小型艦艇及び潜水員というその特性を活かし、入り組んだ沿岸部において瓦礫をかき分け、汚濁した海中に潜り、捜索救難の任にあたりました。また、同時に半島僻地や島に孤立する住民に対し救援物資を輸送する任務にも従事しました。劣悪な環境の中でも黙々と任務を遂行する隊員たちは、皆様の掃海魂をしっかりと受け継いでおります。

こうした中、航路啓開以来の掃海の伝統を受け継ぐ我々は、平時・有事を問わず、いついかなる任務が与えられようとも、これを整齊と遂行し、以て国民の負託に応えるべく、日々精進し、即応態勢を維持する覚悟であります。

本日ここに、改めて、身命を賭してその使命を完遂されました皆様の偉業を忍びつつ御霊の安らかならんことをお祈りすると共に、我が国の行く末と海上自衛隊の諸活動に一層のご加護を賜らんことを祈念して追悼の詞といたします。

平成二十四年五月二十六日

海上自衛隊掃海隊群司令

海将補 徳丸 伸一

掃海隊群の広報

5月25日(金)19時30分から22時までの間、高松港に入港している掃海母艦ぶんご及び掃海艦艇2隻並びに朝日岸壁係留の掃海艇1隻が、高松入港時恒例の電灯艦飾を実施しました。



夜景に艦艇が映える電灯艦飾

本年度は天気に恵まれ、26日(土)は掃海母艦「ぶんご」(27日(日)も実施)、掃海艦「はちじょう」、掃海艇「みやじま」が一般公開を実施しました。

両日ともに、多くの家族連れや中高生など合計10,000名以上の方々ที่มา艦されたことは、海上自衛隊、掃海部隊に対する高い関心が得られているものと考えております。



来艦者も乗員も笑顔一杯の一般公開



晴天の高松港外をクルージング

27日(日)は午前・午後とも「みやじま」、「はちじょう」による体験航海が実施されました。320名以上の方が乗艦されて、晴天で穏やかな高松港外での航海を楽しまれました。